

小説

井上次雄

小野栄吉

選

入選

スクロールする境界線 ～私だけの静寂～

石田利光

第一章…適度な彩度

五時限目の世界史の授業は、まるで行き先のない各駅停車に乗っているような退屈さだった。

使い古されたチョークが黒板を叩く乾いた音と、誰かの消しゴムが机を擦る音。窓の外では、春の終わりの生ぬるい風が、校庭の砂を小さく巻き上げている。その向こうには、いつもと変わらないお城の天守が、白く、無機質に街を見下ろしていた。

私はこの教室というパズルの中で、過不足のない一ピースとして、ただそこに嵌まっていた。目立つ色の服を着るわけでもなく、か

といつて誰とも口を利かないわけでもない。私の輪郭は、この教室の景色に、ちょうどいい彩度で溶け込んでいるはずだ。教壇に立つ先生の、どこか酔いしれたような声が鼓膜を滑っていく。

「いいか、あと一年もすれば、君たちもこの国の未来を選ぶ権利を手になることになるんだ」

私はシャープペンの先で、ノートの隅に複雑な幾何学模様をなぞり書きした。

主権者。先生はそう言ったけれど、私にはそれが、重たすぎる冬のコートか、あるいは実体のない幽霊の名前にしか聞こえなかった。

机の下で、そつとスマホの画面を点ける。液晶の向こう側では、世界中の悲劇も、誰かの怒りも、一瞬で指先を通り過ぎていく。私の現実には、放課後にコンビニで買う新作ス

イーツの在庫や、明日の小テストの範囲、そして充電が残り十パーセントを切ったスマホのバッテリー残量。それだけで、隙間なく構成されている。

「……ちゃんと考えておけよ、自分たちのことなんだからな」

先生の締めくくりの言葉に、私は心の中で小さく息を吐いた。

自分たちのこと、と言われても、その「自分」がどこにいるのかさえ、私にはよく分からない。鏡の中に映る制服を着た少女も、SNSのタイムラインに流れる誰かの意見に『いいね』を押す私の指先も、全部が借り物のような気がしていた。

休み時間。斜め前の席では、数人の女子が身を寄せ合って、とりとめもない言葉を投げ合っている。

「ねえ、昨日のあの動画見た？ 超ウケるんだけど」

「見た見た。っていうか、あの炎上してるやつ？ 逆にエモくない？」

「それな。あ、ていうか放課後どうする？」

駅前のおそこ寄ってく？」

彼女たちの言葉は、中身のない記号のように教室の空気に溶けては消えていく。昨夜、私の指先を震わせたあの凄惨な戦火の映像も、彼女たちにとっては放課後の予定と同じ熱量で消費される「トピック」に過ぎないのだ。

私はその軽やかな喧騒から視線を逸らし、窓の外、低く垂れ込めた空を眺めた。

ふと視線を上げると、窓の向こう、お堀の周りの新緑が目飛び込んできた。

数百年も前からそこにあるらしい石垣と、昨日届いたばかりの未読通知。

そのあまりにアンバランスな二つの世界の境界線で、私は今日も、正解のないパズルを解き続けるふりをしている。

第二章..借り物の言葉

塾の帰り道。ママの運転する車の助手席は、私にとって一番「透明」になれる場所だ。

フロントガラスを流れていく街灯の光が、規則正しく車内を横切り、私の膝の上で眠るスマホの画面をときどき白く照らす。私はその光の点滅をぼんやりと眺めながら、今日一日の、パズルのピースとしての自分をゆつく

りと解体していた。

ふと、ママがカーステレオのボリュームを上げた。

少しノイズが混ざったFMラジオから、聞き慣れない、けれど耳の奥を直接指で弾くような、硬いドラムの音が流れ出す。その振動が助手席のシートを伝って背中に響く。

「……あ、懐かしい。まだ流れるんだ、この曲」

ママが独り言のように、けれどどこか遠い記憶を掘り起こすような声で呟いた。

「何、これ。昔の曲？」

「そう。ママがちょうどあなたくらいの頃に、すごく流行ったのよ。みんなこの歌を聴いて、自分たちの代わりの声を上げてもらってる気がしてたわ」

スピーカーから、ざらついたギターの音と共に、若い少女の歌声が響いてきた。

今の私たちが聴いている、完璧に調教されたデジタルな歌声とは違う。どこか喉を枯らしたような、剥き出しの感情がそこにはあった。

——嫌なことは、嫌だと言いなよ。自分を殺して、笑うのはやめなよ。

そのフレーズが車内に満ちた瞬間、私はスマホを弄る指を止めた。

今のSNSなら、一瞬で「当たり前すぎて草」と切り捨てられそうな、あまりに単純な言葉。

けれど、その声には、今の私が必死に維持している「適切な彩度の日常」を、一瞬で塗り潰してしまうような、逃げ場のない「熱」が宿っていた。

「ねえ、ママ。この歌、何を嫌がつてるの？」

思わず聞いてしまった。すると、ママはハンドルを握る手に少しだけ力を込め、曖昧な苦笑いを浮かべた。

「さあ……。何だったかしらね。でも当時は、この歌を聴いているだけで、自分たちが何か大きなものと戦っているような、そんな気分になれたのよ」

「戦うって、何と？」
「……世の中、かな」

ママが口にしたその言葉は、学校の先生が言う「主権者」よりもずっと、実体のない幽霊みたいに聞こえた。

ママたちは、この歌を聴いて「嫌だ」と言ったのだろうか。何かと戦って、何かを変えたのだろうか。

目の前でハンドルを握り、明日の夕食の献立を気に病み、ニユースの悲劇を「怖いねえ」と言いながら、安売りのチラシをチェックしている今のママのどこに、あの激しい歌声の破片が残っているというのだろう。

歌はサビに向かつて、さらに激しく「自由」を叫んでいる。

私には、こんなふうに声を荒らげて否定したいものなんてない。そもそも、何かに期待したことさえない。ただ、この静かな車内のように、波風立てずに運ばれていきたいだけなのに。

——自分を殺して、笑うのはやめなよ。

そんなこと言われたって、そうしなきゃ明日の教室のパズルには嵌まらない。

私は、自分が一番隠しておきたかった臆病さを、土足で踏み荒らされたような気がして、窓の外へ目を逸らした。

第三章…剥き出しの悲鳴

夜の闇に吸い込まれていく街灯の光が、まるで誰かの燃え尽きた情熱の残骸みたいに見える。

自室に戻り、照明を落としたベッドに潜り込む。

制服を脱ぎ捨て、パジャマに着替えても、耳の奥にはまだあの喉を枯らしたような歌声がこびりついて離れない。

——嫌なことは、嫌だと言いなよ。

暗闇の中でスマホを手にとると、液晶の光が網膜を刺した。

私は無意識に、いつものように指を滑らせる。

画面の中では、誰かが流行りのダンスを踊り、誰かがお勧めのカフェを紹介している。

そのすぐ下に、またあの暗い色の写真が紛れ込んでいた。

砂漠のような大地に、いくつもの赤い火柱が上がっている。どこかの国と、どこかの国。

ニユースのコメント欄を覗くと、そこには「正解」を探したがる大人たちの言葉が溢れかえっていた。

『今こそ、我が国はどうあるべきか真剣に議論すべきだ』

『このまま静観していいのか？ 責任ある選択を』

『国際社会における日本の立ち位置を考える』

うざい、と思った。

「我が国」なんて大きな言葉を主語にして、まるでお城の中からチェス盤でも眺めているみたいな言い草。そうやって言い合っている人たちも、スマホを置けば、ママと同じように「明日の予習は終わったの？」なんて、狭い世界の日常を押し付けてくるだけなのに。自分たちで汚して、こじらせた世界の結末を、どうして「未来を選ぶ権利」なんて綺麗なパッケージに包んで、私たちの世代に投げ渡そうとするんだろう。

指を止める。

音もなく流れる映像の中では、爆発の煙がゆっくりと街を塗り潰している。そこには「我が国」なんていう抽象的な言葉では救えない、血の通った「嫌だ」という悲鳴が、きつと無数に響いているはずだ。

なのに、次の瞬間には、私の指はもう別の場所をなぞっている。

画面は切り替わり、次は「一週間で激痩せ

するダンス」の動画が、賑やかなポップスと共に始まった。

さっきの爆炎は、もうどこにもない。

ドローンの羽音と、インフルエンサーの笑い声が、同じスクロールの線上で等価値に並んでいる。それが私の生きている世界の、本当の姿なんだろう。

私はスマホを裏返し、暗闇を凝視した。

耳を澄ませても、聞こえてくるのは深夜の冷蔵庫の低い唸りだけ。

どこかの国で火柱が上がっている。

大人たちは安全な場所で、言葉の礫（つぶて）を投げ合っている。

そして私は、明日もまた何事もなかったかのように、あの退屈なパズルのピースに戻らなければならない。

そのことが、今は何よりも、たまらなく「嫌」だった。

第四章…私だけの静寂

カーテンの隙間から差し込む朝日は昨日と同じ色で、食卓には昨日と同じように、ママが焼いた少し焦げたトーストが並んでいる。

「……おはよ」

先に席についていたパパが、顔も上げずに短く応える。その手元では、スマホの画面が絶え間なくスクロールされていた。パパが何を見ているのか、私は知らない。パパもまた、私が昨夜何を見ていたかを知ることはいだろう。同じテーブルを囲みながら、私たちの視線が交わることは一度もなかった。

「ほら、早く食べないとバスに遅れるわよ」

ママはテレビのニュースを横目で見ながら、いつものトーンで言った。

「……気をつけてな」

パパがスマホの画面をスクロールさせたまま、短く付け加える。その視線は、一度もこちらを向くことはなかった。

画面の中では、昨夜私をあんなに動揺させた「どこかの国の火柱」が、一分足らずの短いニュース映像として片付けられ、すぐに今日の運勢ランキングへと切り替わった。

昨日聴いたあの歌の少女は、今もどこかで「嫌だ」と叫んでいるだろうか。それともママのように、いつの間にか「懐かしい思い出」という名前のクローゼットに、その熱を押し込んでしまったのだろうか。

私は何も答えず、リュックを背負って家を

出た。

いつものバス停。いつもの通学路。

教室に入ると、そこには昨日と寸分違わぬ「パズルの図面」が広がっていた。

教壇には、またあのネクタイの歪んだ先生が立っている。先生は黒板を叩きながら、まるで世界中の問題を自分たちが解決できるかのような顔で、再び「未来」という言葉を口にした。

「……だから、自分たちの意志を持つことが大切なんだ。わかるか？」

私は、窓の外を眺めた。

校庭では体育の授業が始まり、生徒たちが笛の合図で一斉に走り出している。

私は、自分がどうすべきかを知っている。

ここで立ち上がって、大人たちの欺瞞を糾弾したり、SNSに熱いメッセージを投稿したりはしない。そんなことをしても、また誰かの「正義」に消費されるだけだ。

私はそつと、スマホの電源を切った。

ポケットの中で重みを持ったその小さな塊を、今はただの黒い石のように感じていた。

先生、ごめんなさい。

私は、あなたの言う「立派な主権者」にはなれそうにありません。

誰かに押し付けられた「希望」で世界を洗浄する代わりに、私はこの「嫌だ」という重たい感覚を、誤魔化さずに抱えたまま生きていく。

流されない。選ばされない。

ただ、淡々と。

この退屈な日常を、自分を殺さずにやり過ごすこと。

それが、十七歳の私にできる、精一杯の「意志」の提示なのだ。

チャイムが鳴り、六時限目の授業が始まる。

私は真つ白なノートの新しいページを開いた。

そこにはまだ、誰の言葉も書かれていない。

窓の外、春の風が砂を巻き上げ、昨日と同じように世界が回っていく。

私は、無表情のまま、今日という時間を一歩ずつ踏みしめることに決めた。

スクロールする境界線の、その外側にある、私だけの静寂を守るために。

(元)

(評)

十七歳の高校生の閉塞感漂う日常を描いている。心情の表現や情景の描写に非凡なものを感じる。ただ、「退屈な日常を、自分を殺さずにやり過ごす」と結んでしまえば、読者の興味は半減する。それが抗うことができない現実であることは想像に難くないが、小説の世界は虚構である。まして作者自身、先生の言葉やカーステレオから流れてくる曲の熱量に触発され、日常に疑問を感じているのである。ならば、作中人物を思い切って飛躍させてみてはどうだろうか。読者はかれらが成長、変貌していく姿に共感を覚えるのである。



《総評》

小説部門の応募は一作品にとどまりました。ここ数年、低調な状況が続いています。この状況を打開すべく、昨年はこの紙面で、杉山さんが小説を書くコツを適切、丁寧にアドバイスしてくださいました。

今回は少し視点を変えて、小説を書くことの醍醐味など紹介できればと思います。

まず、ステイヴン・キング氏の言葉を借ります。

「読むに値する書物は少なくとも何かを語っているはずだ」

ここで言われている「何か」とは、主題のことです。主題と言われると大袈裟にとらえがちですが、決してそのようなことはありません。人は誰しも、それぞれの考えがあり、生活やこれまでの体験から興味や疑問を持っています。それが主題と成り得るのです。

これは、今年の入選作にも当てはまります。作者は先生の言葉やカーステレオから流れる曲の熱量に触発されています。関心や疑問の形で意識に上る心象が作品の素材（主題）となっているのです。

そして、これらの素材を展開していくのが作中人物です。かれの行動や発言は作者の考えや人生によって培われた価値観によるとこ

ろが大きいと思います。いわゆる、かれは作者のクローンなのです。

小説の醍醐味とは、現実とは別の虚構の世界で個性を発露できるところにあると思います。

さあ、世界でたったひとつのあなただけの物語を紡いでみましょう。次回の応募をお待ちしています。

小野 栄 吉

